

第三章 頭脳で生きる人類に

一． 文明と頭脳

さて、これからいよいよ本論に入る。人類は大昔、自然に直接本能的に適応して生きていたのであるが、今から約一万年くらい前になって頭脳で生きる人類に変身したのである。

人類は約一万年前までの約二百万年間、自然の中で自然の食糧に頼って、群れのな集団を作って生きていた。それから後は頭脳を使い、自然の法則を応用して農耕、牧畜等を行なって食糧を確保し、組織的な社会を作り、その社会に適応して生きる人類に変わったのである。実はその時から人類は頭脳を使ってしか生き切れない運命に変わったのである。つまり、その後、人類をどこまでも生かし切っていくも、途中で破滅させてしまうも、人類自身の頭脳次第という運命に変わったのである。

人類はこういう運命に変わったことをはっきりと知らなかったが、とにかく、文明化してからこれまでの約一万年間を頭脳を使って生きてきた。以上のところは非常に大事なところなので、もう少し具体的に述べてみよう。

人類は今から約二百万年前、アフリカの一郭に誕生した。人類はその頃、ようやく樹上生活から地上生活に切り換えたのであるが、それ以来、足の進化と共に頭脳も一直線的に進化してきた。この進化は定向進化と言われる進化であって、そのまま進化していったら、やがては生き方の主導的な役割を本能に代って頭脳が引き受けるようになる進化であった。そして事実、そうなったのであるが、それは人類が発生してから約百九十九万年後、今から約一万年前になってである。それは具体的には人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理によってなったと言える。約二百万年前の人口は一人そこそこであったと思われるが、それから自然淘汰力の厳しい自然界にあって、毎年二・五人くらいずつ増えて、約百九十九万年前後には約五百万人になった。

食糧は自然の食糧に頼っていたので、他の人間大以上の動物ならこれほどまでに増えられなかったろうといわれているが、人類は進化した頭脳を使って、地球の隅々まで分布して適応することが出来たので、これほどまでに増加した。しかし、人口はさらに増加しよう

という傾向をもっていたが、自然の食糧の限界によって、人類は自然から約五百万の人口に抑えられた。この時の人類の苦みは歴史上最大だったに違いないが、この苦しみがあったればこそ、その苦しみの中から文明が誕生したのである。つまり、その頃、今とほとんど変わらないほどに発達していた頭脳によって、自然の法則を応用して食糧を人為的に作り、新しい生き方をしようという動きが必然的に起こって文明化したのである。

しかし、このことによって人類の運命が変わったことを現代人は余り意識していない。実は人類が一旦、新しい文明的な生き方に切り換えてしまったら、人口の急増と社会の組織化の進行から、もう、かつての自然的な生き方に戻りたくても戻れない非可逆的な運命となったのである。つまり、気づいてみたら人類は、新しい生き方に切り換えたと同時に、頭脳を頼りにしてしか生きられない運命の人類に変わってしまったのである。その時から人類は、人類自身を生かすも殺すも人類自身の頭脳次第という運命に変わってしまったというわけである。

人類はこれまで、こういう運命が変わったことをはっきりとは認識してこなかったが、とにかくこれまで、頭脳で生きてきた。しかし、それは中途半端な頭脳で、とても永遠に頼っていける頭脳ではなかった。そのため人類は、高度に発達し、最高に複雑化した文明社会に対応できなくなって、思考が悪循環し、埋没せざるを得なくなりつつある。これはまるで、自然に頭脳でしか生きられなくなった人類が、その頭脳でどこまで生きて行けるかをテストされているようなものであり、今日ここに至って刀折れ、矢尽きて、自然に降参せざるを得なくなつた凶と言える。とにかく、我々人類は今、約一万年前に頭脳で生きられなくなったら破滅する他ない人類に変身して以来、最大のピンチに立たされている(原始時代末期のピンチと合わせると二度目)。

しかし、よく考えてみるがよい。自然は無私厳正中立なのである。人類は人類の意思によってではなく自然の法則によって、頭脳で生きるべき人類に変身したのである。つまり、人類が頭脳によって生きる運命になったのは、進化の結果なのである。それは頭脳によっても自然の論理と対応して十分に永遠的に生きられる素地が出来上ったから、自然は頭脳で生きる人類を出現させたと言える。したがって、悲観することはない。楽観してよい。人類は頭脳によっても永遠的に生きられる運命にあるのである。問題はその与えられた頭脳で、いかに自然や自分らを正しく読んで生きていくにかかっているだけなのである。それが難しいからこそ今日的となっているのではあるが、しかし、永遠化の論理は自然に存在としてあるのである。それゆえ、それは哲学的認識能力を発揮してかかれれば捉えられ

るものである。したがって、その能力を発揮して、その論理を捉え、それによって科学を指揮コントロールしていけるようになれば進化線上の本物の頭脳になると言える。永遠化可能な頭脳になると一言える。しかし、現実には科学的認識能力だけが発揮されているため、片肺飛行となり自爆しそうになっている。

哲学と科学の関係をもっと詳しく述べる前に、この片肺飛行の現実を見てみることも大切である。すなわち、哲学不在下の科学文明の暴走の実体をである。

二、哲学不在下の科学文明

科学技術が大発達して、文明は大発展したが、科学技術の発達とはとりも直さず学問の発達であり、頭脳の発達である。あらゆる学問は分岐に分岐を重ね、分らないことがないくらいに発達し、あらゆる問題を解くに至った。それだけ人間は知恵者になり、生きる力を身につけているわけであるが、それなのに、このまま行くと人類の破滅はまぬがれないということは一体どういうわけか。しかも、それに対してあらゆる学者が有効な解答をし得ないとはどういうわけか。

考えてみると、その破滅性は学問の向上と平行して成長している。これは学問が何か大きく間違っ構築されているためでしかない。それがどのように間違っているかは誰れも言っていない。しかし、間違った学問のためであることは間違いない。頭脳でしか生きられなくなった人類の頭脳である学問が発達すればするほど、それだけ人類は破滅の方向に向かう。これほどの矛盾がどこにあるか。それは哲学不在のためであり、文明の生みの親である頭脳が中途半端になっているためでもある。もっと言うなら頭脳の二重構造による片肺飛行のためだと言える。

我々は今日、科学で新しい知識を切り開き、科学に頼って生きている。そして、今後も科学に頼るしかないと思っている。しかし、その科学が頼りないところに今日の問題があるのであるが、それでもなお、科学に頼っていくしかないことだけは間違いないことだとすれば、科学の、一体どこに問題があるのか、ということがいよいよ問題になるが、この疑問に対しても、片肺飛行説は答えを与えてくれる。以下、極端な言い廻しを避けてじっくり考えていってみよう。

人はそれぞれ、生まれ合わせた社会、時代によってその人の一生は大体決定される。いかに未開の原始社会に生まれようとも、高度の文明社会に生まれようとも、その人にとってはそこが人生の場所であり、すべてとなる。それでは、我々が現在生きている社会は一体、どういう社会だろうか。それをこれからはっきり認識していきたい。

我々が今住んでいる社会は、高度の科学技術によって作られた科学文明の社会と言える。ある新聞記事によると、一九四五年までに人類が永々と何千年かかかって築き上げてきた科学技術を、グラフに描くと九センチの高さになるという。ところが、その後、一九六〇年までのただの十五年間の高さは、何と十三階建てのビルディングに匹敵するという。いささかオーバーに聞こえるが、それくらいに現代の科学技術の発達は見ざましいものである。我々は、現代の科学技術の成果であるジャンボジェット機とかコンピューター、人工衛星、核兵器、身近なところではモーターゼーション、家庭電化製品等と接しているが、それらは実際の科学技術の何百分の一でしかなく、我々の日常、目や耳にしないところにおける発達の方が凄いと見える。それらの科学技術の発達のお蔭で我々の生活は確かに、大いに合理化され、豊かとなり、幸福感も増した。そして、我々は科学技術を絶対と認め、科学技術に一層の期待を寄せたものである。

しかし、その幸福感も期待も長続きはしなかった。科学技術によって発達した現代文明に大きな歪みや弊害が現われ始め、科学技術は必ずしも、絶対でも人類の味方でもないことを知ったからである。科学技術は元来、中立的であり両刃の剣的な性格をもっていて、利用する人間次第で良い結果をも悪い結果をももたらす性質をもっている。主体性がなく、真の利用の仕方を知らない人間等に利用された科学技術は、顕著にその弊害を現わし始めた。一年間に百人に一人の割合で死傷者を出すに至った日本の交通災害、それに排気ガス、工場煤煙、家庭塵等による大気の汚染、さらに、工場廃水、家庭廃水による水の汚染などはそれである。これらは、恐さの極く表面的な一部分であって、もっと恐ろしいことは、我々の無知から一方的に科学技術を過信して、限りある我々の生存の母体である地球を約三十九億人で突つき合って、もの凄いエネルギーで破壊しているということである。

人類は地球の扶養能力、循環機能等を調べもせずに勝手に、それぞれの欲求に基づいて科学技術を無計画に使用していくなれば、やがて、地球は破滅し自分らも生きられなくなることは明らかである。それは、いかなる戦争よりも確実に襲ってくる最も恐ろしい自然淘汰力と認識しなければならない。

また、角度を変えて科学技術の影響を見るならば、文明一般にも急激な変化をもたらす

ていることが分る。科学技術が起動力となって発達した文明社会は、すべてが多様化、加速化、複雑化の極に達しつつあり、今や人々はそういう社会について行けず、意識は行き詰まり、混迷状態にある。例えば、この急激に変貌する社会にあって、教師を始め世の指導者のすべてが教育のあり方について定見を持ち得なくなって、議論は悪循環している。もちろん、経済の運営の仕方についても政治のあり方についてもその通りである。そして、若者たちのある者は、逃避的、厭世的になってヒッピー化し、またある者は暴力的反抗的になってゲバルト化している。

大体、ほとんどの人々がその急激な変化のために、自分らの住んでいる社会の内容も、その社会がどちらの方向を向いて歩んでいるのかといった最も基本的なことがらも分からなくなっている。

以上のように、今、人類は無知と自ら生んだ科学技術によって危機に直面し、その深みは加速度的に増加している。本来、科学技術は人類のために開発されたはずなのに、なぜ、それに人類は悩まされなければならなくなったのか。そして、科学技術が人類に対して中立であり両刃の剣であると言うのなら、なぜ、それも哲学なり科学によって解明し、弊害のない利用の仕方をしないのか。誰れでも、この点に疑問と不可解さを覚えるはずである。今日、世界の数多くの識者が、これらの問題を解決しようと思われているが、ほとんどの思考が行き詰まり、悪循環的となっている。なぜ、そんなに難しい社会となってしまったのか。これについて幾人かの人々は、以下のように考えている。

これまでの社会はテンポが遅い上に、精神面の強く支配した社会であったので、人々が初めて経験する現代の科学文明に対応する心の準備や、社会の舵取り機能を確立しなければならなかったのであるが、その確立以前に現代の科学文明は怒涛のようによって来て、間に合わなくなってしまった。そのため、今日は、人々の精神面が混乱し、正確な判断を下しかねている状態なのである。単純な社会のうち、単純な舵取り機能でも用が足せ、また、そういう社会には、割合しっかりした自動調節機能が働いているもので、単純な模索的思考でも、どうにか試行錯誤的ではあっても、処理は出来るものである。しかるに、今日のように、急激な変貌をするダイナミックな社会では、自動調節機能は働いていても、大きな自己運動体的機能となってしまっていて、もはや、それには頼れなくなっている。ここに混迷がある。

しかしながら、人類はこれまで、原始社会から文明の初歩的社会を経て、今日の高度文明社会に至ったのは他の動物のような本能にのみ頼ることを否定した頭脳の力によってで

あった。

今日の危機的な状況においても、やはり、この頭脳の力によって解決し、突破して行かなければ生きられない運命にある。それには現代の急変する科学文明に対応出来る、かなり深く幅の広いシステム的な思考がなければならぬ。その思考体系は現代文明の推進役である自然科学に対応する社会科学によってなされなければならない。今日、ここまで言う人は少なくない。しかし、ここから先を言う人は余りいない。問題を解く鍵が社会科学の飛躍的發展にあると気づいている人はいるが、いかにしたら發展させられるかということをも具体的に言う人はほとんどいないのである。

三、哲学と科学

今日、細分化し過ぎた科学を総合化して力ある科学とし、現代社会の要求に対応する科学にさせようという試みが活発である。確かに、各個別科学が互いに孤立している状態よりは、隣接科学同士がまず結びつき、そして、さらに可能なら、全体が一つにまとまって力を出すことは、マイナス面よりもプラス面の方が遙かに大きいに違いない。

しかし、何の哲学も統一認識もないもとでの科学の総合化は、口で言うより非常に難しいと考えられる。技術的にも難しいが、内容的にはもっと難しい面をもっている。仮に形式的に総合化が出来ても、それが本当の総合化かどうか、真理に照してみなければ分らないわけであるが、その真理がないのだから照しようがないというジレンマがある。したがって、今日の哲学不在の下での科学の総合化は、最初から単なる個別科学の寄せ集めに終る可能性しかもっていないと言える。特に、そのことは社会科学の方に言える。小さな例を上げて考えてみても、その難しさははっきり言える。例えば、個別科学のように部分として雑然としてある、瓦、柱、畳、壁材料、戸、障子、硝子、板、襖、土台等から家を作ったことも見たこともない人が、家という概念が構成出来るかどうかと云ったら、恐らく不可能と思われる。逆に、家を作ったこと、あるいは、作っているところを見たことのある人なら、それらを見て、家という概念を容易に構成出来ると思われる。そのように考えられるから、哲学や設計図のないところでは、真の総合化も概念構成も不可能に近いと言わざるを得ない。

さらに、単なる総合化から価値観が出てこないという弱点も見落してはならない。実に、現代科学の泣きどころは哲学をもたないところにある。

しからは、統一的な認識、すなわち、哲学を発見し、その下での真の科学の総合化、プログラム化は可能なのかというと、確信をもって可能であると言える。その哲学は存在としてあるものゆえ、誰れにでも捉えられる関係にある。その哲学について少々述べ、その後哲学と科学について述べることにする。

人類社会の一切の現象は、全く当然のことであるが、人間が存在しているから起こり、もし、存在していなかったら一切起こらないと言える。したがって、今日の社会が複雑化して、すべての問題がもつれた糸のようにからみ合い、後先が分らない状態になっているが、人間存在の根源から発生学的に系統を追って、じっくり思考したなら、すべてがきれいに認識出来る関係にあると言える。今日の人類社会を樹に例えて考えるなら、若い木ではなく、枝葉が鬱蒼と繁茂した一本の成木に似ている。社会という樹の本体は人間であり、この樹はその昔、人間の発生によって芽を出した。その後、人口の増加と共に成長し、人間の活動が複雑化するのに比例して枝葉を繁茂させ、今日の成木になった。人類は人類の歴史を樹のように形を残してはいないが、もし、残してきたとしたら、歴史の過程をどこまでも(枯死するまで)形に残してきた樹の姿に似ていたと思われる。実に成木の姿は、人類の歴史的過程と現在をありのままに現わしている姿と言える。

我々は誰れでもごく普通に、一粒の種から成長して枝分れして成木になっていく樹の姿を、系統的に理解出来る。この樹の姿と似ている人類の歴史的過程をも、我々が樹を理解すると同じように人間の存在から理解するなら、すべてがきれいに認識出来る関係にあると言える。

また、文明社会の発展はどうしてなるかということについては、科学技術からでも経済からでも頭脳からでも欲望からでも、さらにその他あらゆる要因からでも考えられる。しかし皆、壁に突き当たる。ところが、人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理からだけは、壁に突き当たらないのである。それはなぜなのかと言うと、それが根本、原点からの思考だからである。人間が存在するからすべてが始まり、すべてが問題となる。そこからの思考だからである。統一的な認識が誰れにでも捉えられる関係にあるとは言っても、このように、アポロ宇宙船が大気圏突入の時のピンホールのような思考の入口というものがある。それさえ間違わなければ、という前提はある。

これより、哲学と科学の問題に触れることにしよう。人類に関したすべての問題、それ

は人口問題、食糧問題、経済問題、資源問題、環境問題、情報の問題、教育の問題、思想の問題、戦争の問題、その他ありとあらゆる問題を一つの体系の中で見るという認識はこれまでなかった。それが可能である。一見、現象のすべては、個々ばらばらに勝手に発現しているように見えるが、最初から発生学的に発生しているものであるから、すべてをありのままに発生学的に系統的に捉えたら、論理的に言っても一つの体系認識とたるのである。こう見るのが自然であり本当である。

これまで、人間や社会に関して研究してきた社会科学のすべてが、そういう統一的認識という基盤の上に立っていなかったために、個々ばらばらな研究であったばかりか、完全な科学ともなり得なかったとも言える。要するに、科学の対象は切れ目のない対象ゆえ、本来、科学も統一的なものでなければならなかった。しかし、切れ目のない対象を統一的に認識して、統一科学とする統一論理、すなわち、哲学がなかったので、これまではそれぞれの科学者たちが思想等をもとに科学してきたので、ばらばらとなってきたと同時に完全な科学ともなり得ないできたのである。ここに文明が複雑化の頂点に達して、一番社会科学の力を借りて歩みたい時に、社会科学が何の力ともなり得ず、評論家的としかなくなっていない理由がある。

社会科学は人類の頭脳である。社会科学が人類の頭脳として本当の機能を果たしていくためには、一刻も早く完全な科学とたならなければならない。そのためには、統一的な認識としての哲学をまず捉え、その哲学の下に社会科学をシステム化し、頼りになる統一的な科学としなければならない。

また、哲学と科学の関係を次のように認識することも出来る。経済学は非常に難しいと言われる。経済学の対象には、物理学や化学の対象のような普遍的な法則がないからである。そればかりでなく、経済学が対象とするのは社会の中の経済という面だから、社会そのものが根本的に分っていなければ、経済学は学問として独立し得ない関係にあるからである。かつて、アメリカの著名な経済学者であるレオンチェフ教授が、テレビで"経済学はまだ哲学的段階にある"と述べたが、全く同感である。

他の個別社会科学もみなそうである。社会の全体が解明されていないのに、社会の個々の側面を研究している個別科学だけがしっかりと確立するということはあり得ないからである。個々の科学が本当の科学となるためには、まず社会が統一的に認識され、その統一認識の上で統一的に科学が行なわれるようにならなければならない。これまでは、哲学的に社会の全体が解明されず、社会学者たちは哲学に基づかないで科学してきた。そのため、

すべての社会学者は手さぐりのみしか研究してこれなかった。つまり、社会は全体が解明されたい限り、それぞれの部分を研究する個別科学は、常に哲学的にしか研究出来なく、本当の科学とはなり得ない関係にあると言えるのである。

科学は大別して自然を対象にする自然科学と社会を対象にする社会科学の二つがある。このうち、哲学が特に問題となるのは社会科学の方である。それは科学の対象と価値の問題からである。自然科学の対象は静態的にして法則通りに変化し、同じような繰り返しをする対象である。したがって、自然科学は、自然科学者たちがそれぞれの分野を思い思いに研究し、その成果を持ち寄ってつなぎ合わせるだけで、マクロな自然と対応する統一的な理論が構成出来る科学である。これに対して、社会科学の対象は動態的にして人間の意思の働く分野ゆえ、厳密な法則性はなく、同じ繰り返しもしないので、対象から規制されることが殆んどなく、したがって、哲学不在の下で自然科学者のみ、各自が思い思いに科学して、それを持ち寄ってつぎ足すと、今日的となってしまふ科学である。このため、社会科学はしっかりした哲学に支えられなければならない関係にあるのである。また、価値の問題から哲学と社会科学が深い関係にあると述べたが、本来、社会科学は自然科学と同等の立場に並ぶ科学ではない。自然科学は極端に述べると、自然をただ解明するだけの科学であるが、社会科学は“人間とは何か”“人間はいかに生きるべきか”“社会をどう運営すべきか”“自然と人類の調和をどう図っていくべきか”から“自然科学をどう発展させ、どう利用していくべきか”等までの一切を考え、判断していく、人類の生き方に関する価値の科学だからである。

もう少し詳しく述べると、すべての人類がこの地球上で生きていくためのプログラムや政策を作り、あらゆる思考、行動の先頭に立たねばならない科学である。つまり、社会科学は人類の具体的な頭脳なのである。したがって、社会科学は自然科学と同等の立場に立つ科学ではなく、リード役の科学である。現実には社会科学は全く振わず、自然科学が独り歩きしているが、それが哲学の不在からきていることはもう言うまでもなからう。

そういうわけで、哲学は、社会科学とは二つの意味で、すなわち、対象と価値の問題において深い関係をもっているのである。そのように哲学と社会科学が深い関係にあるので、これまでわざと、科学すなわち社会科学と受け取られるような述べ方をしてきたのである。

四、社会科学は飛躍できる

二つの科学のアンバランスが哲学不在から起こっていることについてはすでに述べた通りであるが、それはまた、対象の違いから起こっていることも事実なので、これから、その両科学をアンバランスに発達させている対象について述べる。その中で、今まで全く不利、短所とされてきた社会科学の対象が、実は非常な長所の持ち主であったことを述べる。その前に一つの面白い認識を披瀝しておきたい。

今日、社会に対する見方には数多くの見方があるが、百人百様のとなっているが、自然に対する見方は余り異なった見方がなく統一的である。ところが、大昔はこれと全く逆だったのである。大昔は自然に対する見方が百人百様の、社会に対する見方は統一的だったのである。

この百八十度の転換は社会の複雑化と自然科学の大発達によって起こったのである。大昔の社会は郡落的な小単位の社会で単純だったために、難しく考えなくとも理解し合えた社会であったが、文明化して複雑化してくるにつれて分りにくい社会となってきた。それでも、社会を専門に研究している社会科学が、もし、大発達していたならば、社会は統一的に見られていたに違いないが、その肝心の社会科学が発達していないために、社会は百人百様の見られるままとなっているのである。

これに対して、自然に対する見方の変化をしてみると、社会と違って、大昔の自然も今日の自然も自然そのものはほとんど変わりはない。ただ違ってきたのは見方の方である。大昔は自然科学が発達しておらず、自然はもっぱら、宗教的、哲学的に見られていた。したがって、迷信は著しく横行し、自然は百人百様の見られていたが、文明化して自然科学が発達してくるにつれて、自然は統一的に見られるようになってきたのである。以上のようにして、社会と自然に対する見方が逆転したのであるが、両者は全く違った関係で逆転していることが面白い。

社会は、社会の内容が複雑化したのに対して社会科学が発達しなかったために百人百様の見られるようになり、自然は自然科学が著しく発達したために統一的に見られるようになった。

それで結局、逆の関係になったのであるが、これは複雑な自然が、自然科学の発達によって単純化されたように、複雑な社会も社会科学の発達によって単純化され統一的な見方が

可能なことを物語っている。実は私がこの本で明らかにしようとしているテーマもこれなのである。

さて、科学は、その対象領域が自然の事象と社会の事象に大別されるのに対応して、自然科学と社会科学の二つに大別される。自然科学は更に、天文学、物理学、生物学、医学、工学、農学、その他多くの個別科学に分れている。社会科学も社会事象の各分野を担当する経済学、歴史学、社会学、教育学、心理学、人類学、文学、法律学、政治学、その他多くの個別科学に分れている。逆に言うと、自然科学、社会科学という名称はこれら多くの個別科学の総称でもある(この辺の文章もすでに述べたところとかなりダブっているが、多少ニュアンスが違ふし、大事な文章でもあるので、あえて載せている)。

一体、なぜ、自然科学の方が非常な発達を遂げているのに対して社会科学の方はそれ程発達せず、両科学の間にアンバランスが生じているのか。先ず、自然科学の方であるが、自然科学の対象である自然、宇宙、物質の世界は人間の複雑な思考や感情がからみ合わない世界であって、法則通りに変化する世界と言える。それで、質的に見極め、量的に測定し、これを材料として仮説を立て、それを精密に実験して実証することによって法則や理論を導き出せる世界である。その上、自然科学の対象のほとんどは永遠性をもち、逃げも隠れもしないので、科学者は落ち着いて冷静に研究が出来るし、また、誰れが研究、実験をやっても同じ結果が出て、しかも科学者の好奇心を誘う神秘的な対象であり、無限の研究材料を抱えている世界でもある。

それに対して、社会科学の対象である社会現象は人々の思考、感情、行動が入り乱れて働き、各領域、例えば、政治、経済、教育、文化等のすべてが連鎖的な関係をもち、しかも、常に動態的であって永遠性をもち、変化の激しい世界である。それだけに、神秘性に欠け、科学者の好奇心を余りかきたてない世界である。このため、社会科学者たちは科学的態度に徹し得ず、成果もまた乏しいと言える。ここに自然科学が驚異的な発達を遂げたのに対して、社会科学の方だけ低迷している理由がある。つまり、両科学のアンバランスの理由はここにあるのである。その結果として、自然科学の成果はほとんどが精密ではっきりしていて、将来の予測が可能的なものであるのに対して、社会科学の成果はほとんどが何となく曖昧で各科学者によって見方が違い、将来の予測も不可能なものとなっている。このような、両科学の影響を受けて我々の常識もアンバランスとなっており、自然に関する常識は昔の哲学者たち以上に正確になっているのに対して、社会に関する常識は曖昧模糊としている。そのため、人々は自分らの生き方の問題を始め、政治、経済、外交、

教育その他、社会に関するすべてのことについての定見をもち得ず、百人百様な模索主義的な思考形態にとどまっている。このように、両科学の発達のアンバランスから我々の常識までが、いびつに形成されてしまっているが、一刻も早く社会科学の立ち遅れを取り戻して、両科学を本来の均衡のとれた姿に回復しなければならない。しかし、それが出来ないからこそ立ち遅れているのに、果たして、それが可能かということ、私は前にも述べたが、それが可能であると確信している。掴みどころのない対象を相手とする社会科学を一気に発展させることの可能性をである。

私はこれまでの哲学者や学者たちの思考の仕方に問題があったと考えている。そして、皆が偶然にもこの共通の落とし穴に陥ってきたために、社会科学を進歩させることが出来ずにここまで来てしまったと思っている。意思の働く社会科学の対象は自然科学の対象とは異なり、単純な自然科学的手法ではもともと捉えられなかったのである。社会科学の対象は人間存在そのものと深く関わりある対象であるため、時間的、空間的にも入り組み合っで連鎖的につながりあい、何一つとして全く独立して現象し得ない関係となっている。しかし、社会現象は人間存在とすべてが深く結びついているので、芋づる式に統一的に認識出来る特徴をその中にもっているのである。したがって、この認識を得て、それに基づいて社会科学を体系化して統一ある科学とし、システムの的に追究するなら、たちまち自然科学との均衡を取り戻すことが可能となり、さらに、その統一認識に基づいて両科学の統一を図って統一科学として発展させていくたら、科学は人類の英知となり、人類の永遠化を約束させることが出来る。

さて、その芋づる式に捉えられる特徴について、もう少し述べるが、ここではさっと触れ、詳しくは第五章で述べることにする。

自然科学の対象のすべては、ほとんど法則的な繰り返しをするが、社会科学の対象のすべては、ほとんど法則的な繰り返しをしたい。そのため、自然科学が一つ一つ着実に自然を法則的に捉え得て、それらをつなぎ合わせることによって自然界の全体を明らかにし得る特徴をもっているのに対して、社会科学にはそれがない。したがって、社会科学は自然科学に比べると、科学しにくい、分の悪い科学と言われてきた。しかしながら、社会を大局的観点ならびに発生学的観点から眺めると、社会の中には大きな法則が支配していて社会はそれを中心に流動し変化していることが分る。それゆえに、その法則を正確に捉えて思索するなら、社会は一網打尽に、あるいは、芋づる式に解明出来て予見も政策もたてられるという、社会にはかえって自然科学の特徴以上の特徴があるのである。

文明時代に入ってから、社会自体に重大な法則が生まれ、それに我々は支えられて生きていることを人類はまだ知らない。したがって、文明社会は、なぜ自己運動するのか、なぜテンポが速くなるのか、なぜ複雑化していくのか等についても皆はよく知らない。その社会の法則というのは、社会の中にある最も基本的なものを捉えて、それを軸にして論理を展開するならば、社会のあらゆるものが明らかに出来るという法則である。それは、もちろん、自然の論理法則とも全く合致するものである。これを見つけて展開しなければならなかったのに、これまで見つけられなかったところに、社会科学の未発達があり、社会の解明が出来なかった原因がある。